

日本発、西村一成、ブルースを描く

西村一成は絵を描き、楽器を奏で、飼い猫の相手をして遊ぶ。外へ出ることは滅多にない。

2017年12月9日 American art & culture online magazine 『HYPERALLERGIC』掲載

執筆：エドワード・M・ゴメズ

名古屋にいる日本人画家・西村一成の、大胆で生き生きとした心理的緊張感あふれる絵を体験する方法がある。その超然とした表現主義的構図の意味を、フォーマリストとなって読み取るのではない。それよりも、音楽を愛する者の観点から、そのちょっと変わったリズムに身を任せるのである。なぜなら、西村はブルースに浸かり、ブルースに鼓舞されながら作品を生み出すからだ。彼は絵画に転向する前はギターを弾いていた。もしその音楽—それは切なる思いや喪失感、深い情感や精神的痛みを大いに暗示している—が視覚的に表されることがあるならば、多分それは西村の作品にもっとも思いがけない形で表されるにちがいない。

現在、西村一成の個展が、日本の自動車産業の中心地である名古屋の二つの会場で開かれている。個展のタイトルは「春雷に打たれた如く」である。一か所は名古屋の商業中心地にあるこじんまりとした画廊「ハートフィールドギャラリー」、もう一か所は都心から少し離れたところにある画廊「ギャラリー・ドウ・セヌ八事」である。両会場とも画家の近作を展示している。展示作品は、西村の絵を2011年から扱っている京都の画廊「ギャラリー宮脇」の宮脇豊氏が選んだものである。

ギャラリー宮脇は、豊氏の父親が1958年に設立、関西の画廊としては、早い時期からシュルレアリスムやアンフォルメル作品を扱ってきた。息子である豊氏の代になり、国内外の現代アート、アール・ブリュット、アウトサイダー・アートなどを広く紹介するようになった。アール・ブリュットのアーティストである郵便配達夫フェルディナン・シュヴァルや、フランスの独学のアーティスト、ジェラルド・サンドレイに関する本を出版し、最近では、スイスの美術史家ミシェル・テヴォーの名著『Art Brut』（1975年 Skira 刊）の初の日本語版『アール・ブリュット 野生芸術の真髄』（2017年人文書院刊・杉村昌昭訳）刊行のためにも大きな役割を果たした。

私は先週、宮脇氏に京都で会い、彼が選んだ西村のスケッチブックを見せてもらった。そして数日後、個展を見るため、再び名古屋で彼と会った。アール・ブリュットとかアウトサイダー・アートとか、いわゆるセルフポートレートとかのオーバーラップする分野で、最も深く歴史的にルーツをたどれるのはヨーロッパや北米だが、日本でもそのパイオニア的研究は、一握りの専門的画商—

多くの場合彼ら自身がコレクターや支援者でもある一によってなされてきた。宮脇氏もそんな一人である。

氏は言う、「この種の絵を日本で売るのは難しい。なぜなら日本人は、独創的で幻想的なセルフポートのアーティストの作品について、何が作品をユニークなものにしているのか、どのように鑑賞するのか、ということ、を、まだ学びつつある過程だからである」と。西村も独習者だが、宮脇氏は、彼の基礎的背景をとくに強調せず、ただコンテンポラリーアートの文脈で紹介している。その並みならぬ作品を定期的に展覧し、またそれらについての資料も刊行している。（このような資料化活動も日本の画廊では稀なことである。）氏はまた別の言い方もする、「日本ではある種の抽象画を売ること非常に難しいのだ」と。

西村一成は1978年生まれ。私は名古屋では一成の父親、右左夫氏にも会った。「一成は子供の頃も絵を描くのが好きだった」と彼は言う。西村は、音楽を学ぶために東京へ行く。その頃から社会に順応するのが難しくなり、引きこもるようになった。まもなく、彼にとっては絵を描くことが、生きていく上での中心のかつ切羽詰まって駆け込む場所になる。そして時を経ず、描くことにかかりきりになり、全エネルギーを傾けるようになった。彼は東京から名古屋に戻り、今もそこに住んでいるのだが、緊密に結びついた家族のもと、隠遁者のような生活をしている。音楽を愛しており、演奏もする。また猫と一緒にいるのも大好きだ。が、外に出ることは滅多にない。だから今迄のところ、グループ展であれ個展であれ、自分の作品が展示される場所へ出かけたことがない。

日本での西村の作品は、「制約のない」とか、「画家自身の欲するものを意味する」というふうに批評される。このような微妙にコード化された言葉は、彼の創造的衝動は確立された様式に従うものではなく、また理論に導かれているのでもなく、ただ彼の自己表現したいという欲求が抑えきれないのだということを言わんとしているようである。

宮脇氏が京都の画廊で私に見せてくれた、大小の螺旋綴じスケッチブックのなかには、全てのページに奇妙なドローイングがあった。あるべきところのない多数の眼やとんがった舌がぶら下がっているような口を持つ顔、手とか脚とか部分的な人体、太いリングイーネの様な網に絡めとられたキングギドラ、ギターを演奏する人物、便器の脇とか便器に座る女性（画家の母親）、ゆったりと横になる猫、等々。

特に目を引く一冊のスケッチブックにはキノコが描かれており、各ページはシュルレアリストも卒倒するようなイメージであふれていた。だが、またそれは、太い線にもかかわらず、エルズワース・ケリーの精確で繊細な植物描写を思い起こさせる。ちがいと言えば、とにかく西村の生み出すものはすべてが極端であるということだ。しかし同時に、キノコのもつ優しい外形は、それを現れ

出させる獰猛な衝動とはまた違った印象を与えている。

宮脇氏の画廊ではまた、西村が豊氏に送って来る大量の手紙も見せてもらった。氏は言う、「一成は自分が毎日目にするものや日常の活動について書いてくる。また、自分の創作活動や、自作品の性格について述べる。筋張った殴り書きで、日記のように書いたものは非常に読みにくい。しかし、述べていることは極めて興味深く、しっかりと自分を意識して書かれており、誇張とかうぬぼれはまったく見られない。」

実際、今に至るまで、画家の母親は、彼の書くものを読みほどこいてはパソコンに入力してきた。だから宮脇氏もそれらを読むことで、画家の持つ興味や動機を知ることができた。そして、これらの書き物を通じて、西村がブルースに惹かれていること、とくにミシシッピ生まれのギタリスト／コンポーザー、ロバート・ジョンソン (1911-1938) に傾倒していることも知った。ジョンソンの音楽は、そのジャンルでもっとも重要なルーツ資料として熱狂的なファンから崇められている。

西村は次のようにも書いている。「僕は日々ひたすら絵を描きつづけている。呼吸し、食べ、排泄し、眠るのと同じようにだ。線は僕の肉体の延長としてうねり、色は僕の精神の明滅を激烈に映し出す。それは世界との直感的な交錯によって瞬発的に繰り出される。描きあげた末に僕は疲れ果てて倒れ込む。そのとき絵は、僕と不可分な一人の人間のナマの姿だ。」(このような忌憚のない直裁な証言は、日本の作家、太宰治 (1909-1948) の作品の持つ雰囲気を読み起こさせる。とことん内省的で、人間の本質や近代日本社会の見方が辛辣である。) 二つの個展会場に展示されている作品から、鑑賞者は彼の創造的エネルギーの強さを感じるだろう。そのエネルギーが創作を促すのだが、それは西村が上述しているように、「描き上げた末に倒れ込む」ようになることで最高潮に達する。

サイケデリックな「エピグラフ I、生への疾走」(2017) では、ぐちゃっとなった自転車のフレームが、はね散らかしたライトブルーや薄紫色、抑えたカンタロープ・オレンジ色の動きのある背景に浮かんでいる。また、「死の花」(2015) では、厚く塗られた黄金色の渦が、大きくてずんぐりした花瓶から突き出した一群の植物の濃厚な感触を生み出している。その表面には、釉薬をかけて焼いた陶器の割れた表面を思わせるような線が鮮明に刻まれている。西村の使う画材は、アクリル、ジェッソ、胡粉ジェッソ(胡粉は、日本で使うカキやアサリなどの貝殻から作る炭酸カルシウム顔料)、ホルバイン製パミス(モデリングペースト)、パステル、オイルスティックなどである。

「一成の自画像」(2015) では、鎖のような装飾的模様でシルエット化された頭部をもつ自分自身を奇妙に描いている。また「僕に描けと言った悪魔の像」(2015) では、硬くなったパンの表面のような、青緑で厚く塗られた背景から、大きな出目と怪物のような出っ歯の口をもった、ぞくぞ

くするような忌まわし悪魔の像を描いている。

連作「むなしき恋」(2015)は、やや小さなI～V番の五つの作品からなり、そのタイトルはロバート・ジョンソンの最も有名な歌の一つから取られたものである。V番においては、赤い絵具を使って、輝くような垂れ流れる線や、赤やオレンジ色や黄色の溶解物のような形の塊を描き、I番においては、青緑を使って、またIII番では、赤、黒、ブルー、黄色を主に使って、人を捉えて離さないような美を、頭がくらくらするような構図で、その歌の熱い欲望や魂のつぶれるような失望感を、哀調に満ちた表現でとらえている。またI番では、悪魔のような人物の顔が、絵の下から幽霊のように現れ、それは、おそらくジョンソンが、「十字路で悪魔に魂を売り渡し、その引き換えにギター演奏のテクニックを身に着けた」という伝説を暗示しているのだろう。クロスロード伝説はジョンソンの人生を巡る伝説の一つで、西村はそのことをよく知っているのだ。

今開かれている個展では、その他に両親のポートレートがある。エネルギッシュな筆使いで描かれ、黄色や紫、褐色の背景から、明るく白い眼玉が飛び出し、頭や顔はゆがんでいる。また、ある作品はタイトルが漢字一文字で「喜」と書かれ、それはdelightやjoyを意味する。褐色の下部画面と濃いターコイズ色の上部画面から成り、画家は、その上に横向きの頭を線描で上書きしている。その横顔の鼻は三角で、卵型の黄色い目からは涙が一滴流れだしたように見える。宮脇氏は、その絵の細かい所は、今日にする絵の下に描かれた絵の残滓かもしれないと言う。というのも、「西村はものすごくエネルギッシュで、時には、性急過ぎて我慢できず、すでに完成した絵の上に復書きしてしまうこともある」からだ。画家もまた書いている―「創造にすがりつき、祈るように、叫ぶように、ひたすら赤を塗りたくった。やがては赤い絵具は切れてしまったが、そこには“顔”のようなものが掘り出された。」

西村の、こうした文章や強烈な絵を見れば見るほどますます彼が、「描かずにはいられない画家」であるということがわかる。ちょうどロバート・ジョンソンがミシシッピのある十字路で悪魔に出会ったという伝説のように、この日本人の画家もまたかつて、彼のお気に入りの、弾塑性で際限ない表現力をもつ画材の強烈な誘惑に屈服したのだ。

名古屋の隠れ家で、猫とギターを友に、西村一成にはただそれしかない―彼流のやり方で、絵具に心を奪われたまま、彼はブルースを描かねばならない。

(訳・村井啓子、画家の母の友人)

(編集・宮脇 豊、ギャラリー宮脇)